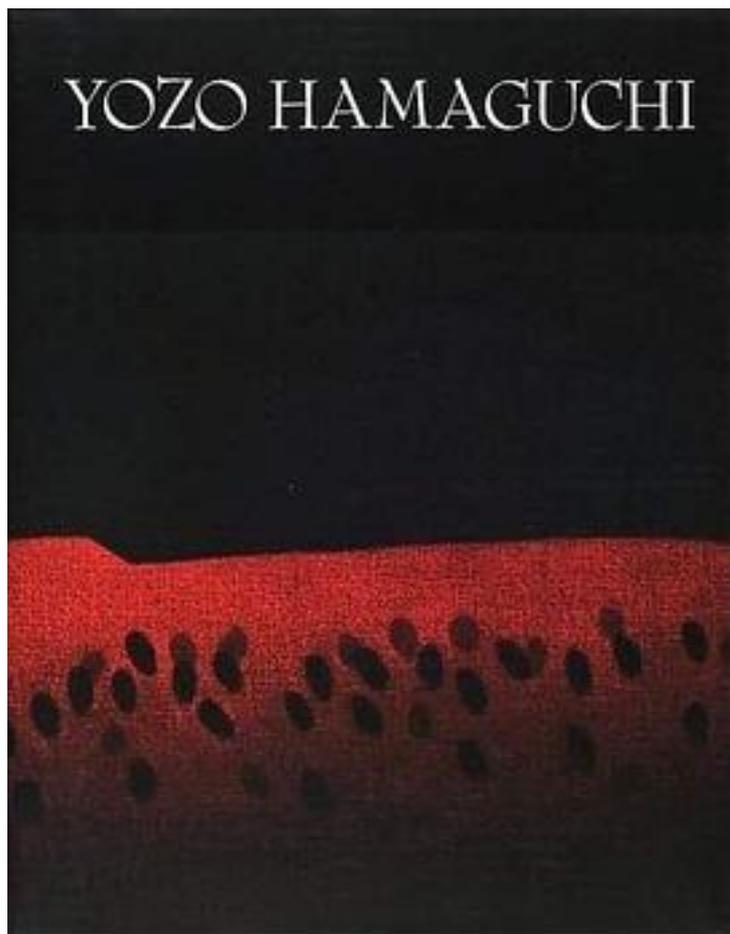


浜口陽三全版画作品集



[浜口陽三全版画作品集_下载链接1](#)

著者:浜口陽三

出版者:中央公論美術出版

出版时间:2000/09

装帧:大型本

isbn:9784805503812

ごく小さな版面に、微細な粒子、濃淡、色合い、そしてそこに登場するさまざまな「ものたち」の形状は、魅惑や美の存在を秘めている。浜口陽三の刻み出す、小宇宙のような作品を全て紹介。

作者介绍:

浜口 陽三（はまぐち ようぞう、1909年（明治42年） - 2000年（平成12年）12月25日）は、日本の版画家。銅版画の一種であるメゾチントを復興し、カラーメゾチント技法の開拓者として国際的に評価が高い。

浜口は1909年（明治42年）、和歌山県に生まれた。浜口家は代々「儀兵衛」を名乗るヤマサ醤油の創業家であり、陽三は10代目浜口儀兵衛の三男にあたる。また、陽三の妻である南桂子も版画家である。浜口は東京美術学校（現・東京藝術大学）では彫刻を専攻したが、2年で退学しパリへ渡航した。パリ滞在中の1937年（昭和12年）頃からドライポイント（銅板に直接針で図柄を描く、銅版画技法の一種）の制作を試み、版画家への一步を記しはじめた。戦時色の濃くなるなか、1939年（昭和14年）に日本に帰国。自由美術家協会に創立会員として参加するが、戦時下にはなかなか作品発表の場がなかった。1942年（昭和17年）には経済視察団の通訳として仏領インドシナ（ベトナム）に渡航し、1945年（昭和20年）帰国している。

浜口は20世紀におけるメゾチント技法の復興者として国際的に知られる。メゾチントは銅版画の技法の1つで、銅板の表面に「ベルソー」という道具を用いて、一面に微細な点を打ち、微妙な黒の濃淡を表現するものである。こうして作った黒の地を「スクレイパー」「バニッシャー」と呼ばれる道具を用いて彫り、図柄や微妙な濃淡を表わす。この技法は写真術の発達に伴って長く途絶えていたものである。浜口はこの技法を復興させるとともに、色版を重ねて刷る「カラー・メゾチント」の技法を発展させたことで知られる。

浜口が本格的に版画の制作を始めるのは、第二次世界大戦後の1950年（昭和25年）前後、40歳頃のことであった。1953年（昭和28年）には再度渡仏し、以後おもにフランスで制作を続けた。1957年（昭和32年）にはサンパウロ国際版画ビエンナーレの版画大賞と東京国際版画ビエンナーレにおける国立近代美術館賞をダブル受賞し、国際的評価が高まった。その後も多くの国際的な賞を受けている。

1971年～1972年（昭和46年～昭和47年）にはブラジルに滞在。フランスにいったん戻った後、1981年（昭和56年）からはサンフランシスコに移住。1996年（平成8年）、日本へ戻り、2000年（平成12年）12月に没するまでの数年間を祖国日本で過ごした。

目録:

[浜口陽三全版画作品集 下载链接1](#)

标签

版画

藝術

日文

评论

[浜口陽三全版画作品集 下载链接1](#)

书评

[浜口陽三全版画作品集 下载链接1](#)